

(研究論文)

## 鑑賞と表現の関連を図った題材構成に関する一考察

——確かな学力を育む小学校音楽科の授業実践に向けて——

福井昭史 西田治（長崎大学教育学部） 永吉由紀（長与北小学校）

### I. 課題の所在

音楽の授業では、以下のような状況がよくみられる。

- ・きれいに歌うことや楽曲を演奏することだけが目的になってしまっている。
- ・音楽づくりでは、主体性という名のもと自由につくっているだけとなっている。もしくは、作品としての質の高さばかりを求めた活動になっている。
- ・鑑賞では、自由に楽曲を聴き、感想を書く活動に終始している。

これらに共通する問題点は、活動そのものが目的化していることである。以前より音楽科を揶揄する言葉として「活動あって学びなし」という文言がある。子どもたちが楽しそうに活動している様子は見えるが、そこにどんな学びがあったのかとなると明確に答えられないような実践に対し用いられてきた言葉である。では、「活動あって学びあり」という音楽科本来の在るべき姿を実現するために何が必要なのであろうか。しかも、その学びが断片的な学びではなく、教育に必要な発展性と体系性を持ち合わせるには何が必要なのであろう。

活動を学びへと昇華させるためには、子ども自身は音楽を楽しんでいるだけであっても、教師は明確な指導の意図(ねらい)を持つことが重要であると考えられる。また、学びが断片的なものとならずに発展性と体系性を持ち合わせるには、様々な工夫が必要であるが、まずは表現と鑑賞の活動の関連を図ることが第一歩となるものと考えられる。知的・音楽的理解と演奏などの表現行為が豊かに関連しあう題材構成が必要である。

以上のような課題意識から得られた問いと仮説を検証するため、以下2点を踏まえた授業を構想し、検証授業を行うこととした。

- 1) ねらいと評価を明確化することで「何を学ぶのか」を明らかにする。それによって学習の成就感と音楽科における学力を保証する。
- 2) 表現と鑑賞の関連を図り、知的・音楽的理解と表現活動を往還することができるように活動を配列する。それによって、理解したことを演奏に生かす、

演奏で体験したことを理解し整理するといった理解と経験の融合を目指す。

一回の授業で何を学んだのかが不明確なままでは、音楽科における学力は形成されているとはいえない。学力の形成されない活動は、「授業」というカテゴリの中で実践していくことは今後難しくなるだろう。それは、レクリエーションや遊びとして展開されていくこととなる。もちろんレクリエーションや遊びとしての音楽も重要であるが、授業として音楽科の活動を行っていくためには、毎回の授業で何が身に付いたかという学力を明確にした取り組みが重要である。その一端に寄与しようとするのが本研究の趣旨である。

## Ⅱ. 先行研究の検討

ねらいの明確化、指導と評価の一体化の重要性、および表現と鑑賞の関連を図った題材構成の必要性については、すでに膨大な量の先行研究が存在する。それらを概観したときに、以下のような課題が抽出された。

- ①鑑賞の際に音楽の何を聴き取るのかがあいまいな場合が多い。
- ②音楽づくりの際に、どのような作品ができたかに焦点があたりすぎ、そこから何を学んだのかが不明確である。
- ③鑑賞で学んだことを生かして音楽づくりを行っている事例は多いが、両者の活動を往還していないものが多い。

①からは、要素や仕組みを絞って聴取することの必要性を、②からは音楽づくりをすることで何を学ぶのかを明らかにする必要性を改めて提示することの必要性を感じた。③については、鑑賞によって音楽の仕組みや要素を学び、それを音楽づくりへと生かすだけで終わるのではなく、音楽づくりを行ったのちに再び鑑賞の活動へと戻ってくるような、両者の往還をより密にした題材の必要性を提案する必要性を感じた。よって、本稿では以上3点をカバーするような題材構成、指導と評価を目指して実践研究を行うこととした。

## Ⅲ. 検証授業

以下の概要で、長崎県内公立A小学校6学年を対象として授業実践を行った。

- 対象：小学校第6学年 2クラスに同一の内容を実施。1クラス約30名。
- 場所：長崎県内公立A小学校 音楽室
- 実践日時：第1時…11/9 第2時…11/12 第3時…11/16 第4時…11/17
- 授業者：永吉由紀

題材の概要及び展開は、次の通りである。

- 1 題材名 日本の音階の特徴を感じ取ろう
- 2 題材の目標

○日本の音階の種類を知り、その特徴を感じ取ったり生かして表現したりする。

○音階が曲想の違いを生み出していることを理解する。

○日本の音楽や音階に興味や関心をもち、主体的に様々な活動に取り組む。

### 3 題材について

本学年の児童は音楽への関心が高く、歌唱では頭声で歌い、互いの声を聴きながら、よりよいハーモニーを作ろうと工夫し、3部合唱にも取り組んできた。また、全校のよい声のリーダーとして、他学年のお手本となっている。器楽では、リコーダーを好み、美しい音色をめざし、聴く活動を大切にしながら学習に取り組んでいる。授業以外でも、学習した曲を演奏する姿が見られる。音楽づくりでは、反復や問いと答え等、音楽の仕組みを取り入れて短いリズムアンサンブルをつくる学習、和音の構成音の中から選んだ音をつなげる旋律づくりの学習を行った。鑑賞では、音楽を聴いてその曲想が強弱、速度、音色等の音楽の要素から生み出されていることを感じ取る学習を行った。

本題材は、日本の音階による様々な楽曲を聴いたり、旋律づくりをしたりする中で、音階の特徴を感じ取り、音階と曲想の関わりを理解することをねらいとしている。日本の音階には、律音階、民謡音階、都節音階などいくつかの種類があり、それらは陽音階、陰音階、琉球音階に大別でき、いずれも5音で構成され、決まった終止音をもつ。また、日本の歌の旋律は、順次進行を基本とするため、歌いやすいという特徴がある。「越天楽今様」（陽音階）、「さくら」（陰音階）、「谷茶前」（琉球音階）は、音階の特徴がよく表れている楽曲であり、音階と曲想の関わりを理解するのに適した教材である。箏と尺八の二重奏曲である「春の海」は、尺八と箏の原編成以外に、フルートやバイオリンとピアノやハープ等の編曲でも演奏され、邦楽と洋楽を比較する学習に適している。これらの教材による学習を通して、日本の音階の特質を感じ取らせることができると考える。

本題材の第1段階では、「越天楽今様」「さくら」「谷茶前」を階名唱するなどして、5音音階による旋律であることを理解させるとともに、日本の民謡などの比較聴取を通して、それら3つの音階の味わいを感じ取らせる。第2段階では、日本の音階による4分の4拍子8小節の音楽づくりをする。順次進行を基本とする旋律とすることや、リズムや音を制限することなどで、旋律づくりへのスムーズな導入を図れるよう配慮した。創作した旋律はグループごとに発表させ、聴取の側には、使われている音階を識別させることで、音階の特質を感じ取る力の育成に努める。第3段階では、洋楽器で演奏されることもある「春の海」を聴取し、日本の音楽と感ずる要因として音階が大きな働きをしていることに気付かせる。また、陽音階は鍵盤楽器の黒鍵のみで演奏できることを知らせ、「春の海」の冒頭の旋律を鍵盤ハーモニカで演奏させ、音階についての学習の深化を図る。目標を日本の音階の理解と感受に焦点化することで、表現（歌唱、器楽、音楽づくり）と鑑賞の活動の有機的な関連を図り、日本の音階についての理解を深めようとする指導計画である。

#### 4 題材の指導計画(全4時間)

次	時	学習内容と活動	評価
1	1	○日本の音階の理解 ・「越天楽今様」「子もり歌」「谷茶前」を階名唱したり、リコーダーで演奏したりし、日本の音階や歌の旋律の特徴を理解する。 ・日本の音楽を聴き、音階を識別する。	・陽音階(律音階・民謡音階)、陰音階(都節音階)、琉球音階の構成音を理解できる。(理解) ・日本の音階の種類を識別することができる。(感受) ・日本の音階に興味・関心をもち、主体的に取り組もうとしている。(興味・関心)
2	2	○日本の音階による音楽づくり ・使用する音階を決め、4分の4拍子、8小節の旋律を創作する。 ・つくった旋律を鍵盤ハーモニカやリコーダーで演奏する。	・音階を選び、リズムや旋律を工夫して音楽をつくることができる。(技能・創意工夫) ・つくった旋律を楽器で演奏することができる。(技能)
	3	○つくった旋律の発表 ・グループごとに発表する。 ・発表を聴き、音階を識別する。	・つくった音楽を演奏することができる。(技能) ・旋律の音階を識別することができる。(感受)
3	4	○日本の音楽の聴取と曲想の感受 ・民謡などを聴き、音階を識別する。 ・「春の海」を聴取し、音階の特徴と曲想との関わりを理解する。	・日本の音階の種類を識別できる。(感受) ・日本の音階が楽曲の気分や曲想を生み出していることを感じ取り理解している。(感受と理解)

#### 5 学習の展開

##### (1) 第1時の学習目標

○陽音階、陰音階、琉球音階を知り、その特徴の違いを感じ取る。

##### (2) 第1時の展開

時配	学習内容と活動	指導上の留意点・評価
導入 8分	1 「越天楽今様」「さくら」「谷茶前」を聴き、本時の学習のめあてが『日本の音階を感じ取ろう』であることを知る。	○3曲とも日本の音楽であることを確認する。 ○曲想を特徴付ける要素の一つとして、音階があることを知らせる。
展開 29分	2 「越天楽今様」を階名唱し、音階の特徴を理解する。 ・構成音に注意しながら階名唱し、日本の音階の特徴を捉える。 3 同様に「さくら」「谷茶前」を階名唱し音階の特徴を理解する。 ・それぞれの音階の特徴を捉える。 「越天楽今様」[陽音階(律音階)]、「さくら」[陰音階(都節音階)]、「谷茶前」[琉球音階] 4 日本の歌の旋律は、順次進行を基本とすることを知る。 ・歌の旋律をリコーダーで演奏し、音の動きが隣の音に移動していることに気付く。	○「越天楽今様」の五線譜を示し、階名唱することで、日本独特の音階があることを、知らせる。 ○同様に独特の音階であることを知らせる。 ○それぞれの音階は構成音が異なるため、味わいも異なることを知らせる。 ☆日本の音階に興味や関心をもち主体的に取り組もうとしている。(観察) ○全ての楽曲が、順次進行を基本とすることを知らせる。
まとめ 8分	5 2種類の「子もり歌」、琉球音階の「多良間じょんかね」を聴き、音階を感じ取る。	○各々の楽曲の音階を確認する。 ☆音階を識別することができる。(挙手)

##### (3) 第1時の分析

##### ① これまでの学習との結びつき

曲を聴いて日本の音楽と感ずる理由を質問すると「和楽器を使っているから」

という答えがあった。児童は、平素から楽器の音色に敏感で、その特徴を生かして曲が作られていることを理解しているため、和楽器という答えが出たと考えられる。また、西洋音楽に比べ日本の音楽は、強弱が付いていないという答えもあり、日本の音楽も西洋音楽と同様に聴き取ることができることがわかった。

## ② 音階の識別

今回の授業は、日本の音階の種類を識別が目標であった。音階の理解に1時間をかけた結果、最後には大部分の児童が識別できるようになったと思われる。琉球に比べて、陽音階と陰音階の違いは難しいと考えていたが、最後には大部分の児童が識別できていた。一方、音階の感じを言葉で表すことは難しく、意見は少なかった。この学習が次時のつくる活動につながったと考える。

### (4) 第2時の学習目標

○音階を選び、リズムや旋律を工夫して、旋律をつくって楽器で表現する。

### (5) 第2時の展開

時配	学習内容と活動	指導上の留意点・評価
導入 7分	1 前時の学習を想起し、楽曲（「汀間当節」「津軽の子守唄」「椎原の駄賃つけ唄」）を聴いてどの音階が使われているか感じ取る。 2 本時のねらいが『日本の音階を使って音楽をつくらう』であることを知る。	○音階をピアノで聴かせ、3つの音階を想起させる。 ☆音階を識別することができる。（挙手）
展開 35分	3 8小節の音楽づくりをする。 ・①使う音階を選ぶ、②4分の4拍子8小節とする、③○を使って書く（記譜の方法）④1・2・4小節と5・6・8小節は同じ（反復）⑤問いと答えの音楽、⑥順次進行を基本とする、⑦楽器は鍵盤ハーモニカかリコーダーを使用するという方法と手順を知る。 ・楽器で演奏しながら旋律づくりに取り組む。	○初めに、つくり方（音楽づくりの枠、記譜の方法）をリコーダーで実際に吹かせながら理解させる。 ○4拍子がわかりやすいようにキーボードで拍子をカウントする。 ○記譜ができない児童には助言する。 ○学習過程の児童の作品を紹介する。 ☆音階の特徴を理解し、見通しをもって旋律づくりをしている。（ワークシート）
まとめ 3分	4 次時に発表会をすることを知る。	○グループごとに発表することを伝える。

### (6) 第2時の分析

#### ① 音楽づくりの枠

音楽づくりでは多くの制限（4分の4拍子8小節、5・6・8小節は1・2・4小節の反復。使ってよい音符は4分音符と8分音符、4分休符のみ。順次進行の旋律）をつけた。制限が多過ぎるのではないかを十分に検討したが、これでも難しい児童もいた。



【音楽づくりの様子】

② 旋律のつくり方

音楽づくりでは、全部つくってから演奏する児童と、演奏しながらつくる児童とがいた。演奏しながらつくるのは、時間がかかるが、良い作品（旋律の雰囲気や大事にしている、音階のよさが出ている、終わった感じがする）が多かったように感じた。始めに全部つくる場合は、音から離れてしまい、機械的で、それぞれの音階の良さがでづらいように感じた。音楽が得意でない児童にとっては、つくれたという達成の喜びが、発表での意欲を高めていた。

(7) 第3時の学習目標

○日本の音階を使ってつくった音楽を、発表することができる。

(8) 第3時の展開

時配	学習内容と活動	指導上の留意点・評価
導入 2分	1 音楽づくりの方法を確認し、全員の前で発表することを理解する。 2 本時のねらいが『日本の音階を使った音楽の発表会をしよう』であることを知る。	○前時を想起させ、本時学習の見通しをもたせる。
展開 40分	3 発表の方法を理解し、グループごとに練習をする。 ・4分の4拍子、8小節をグループのメンバーが連続して演奏すること、演奏のテンポなど、発表の方法を知る。 4 グループごとに発表会をする。 ・個々の児童の音階は知らせず、発表を聴取しながら識別し、ワークシートに記入する。 ・グループの演奏後に、個々の音階を知る。	○グループごとにメンバーが連続して演奏することを知らせる。 ○できていない児童に助言をする。  ○個々の音階をワークシートに記入しながら聴取するように伝える。 ○個々の音階を確認する。 ☆つくった音楽を演奏することができる。(演奏) ☆音階を識別することができる。(挙手・ワークシート)
まとめ 3分	・音階の特徴を生かした音楽づくりと演奏ができたか、音階の識別ができたかなど、本時の活動を振り返る。	○本時を振り返り、発表ができたことなどを称賛する。

(9) 第3時の分析

① つくった旋律とその演奏

Aクラスの作品は、思わぬ所に休符が入ったり、終止に落ち着かない音を選んだりするなど、型にとらわれない個性的なものが多かった。そのため、旋律どおりに演奏することが難しく、拍の流れにのることができない児童が多かった。Bクラスの作品は、不自然な休符や8分音符の使用

日本の音階

日本の音階をつかって音楽づくりをしよう

選んだ音階 ( 陰 ) 音階

階名

○ = ♩    ⊖ = ♪    ● = ♫

ミ ♪ ラ ♪ フ ♪    ミ ミ ミ ♪    シ ラ シ ド    シ ラ シ ●

ミ ♪ ラ ♪ フ ♪    ミ ミ ミ ♪    シ ド ミ ド    シ ラ シ ●

発表会

赤  
緑  
紫

いりりりよよ

りりり

赤  
黄  
青

りりり

りりりいよよ

琉りりり

よりり

【ワークシート記入例】

が少なく、演奏しながら推敲を重ねたという印象の旋律であった。演奏も上手な児童が多く、達成感が大きかったと思われる。クラスのカラーはあるものの、つくる際には演奏が前提であることを意識させる必要があるといえる。

## ② 発表の聴き取り

発表された旋律を聴取する場面では、短時間での音階の違いの識別に集中して取り組み、良く聴き取っていた。聴取後の答え合わせは緊張感があり、音階の識別力向上に有効であったと考える。

## ③ 発表後の振り返り

発表後に良い所を伝えた。児童の演奏から「問いと答え」、リズムが同じ変化のさせ方など、音楽の仕組みの理解が深まったと考える。

### (10) 第4時の学習目標

○日本の音階の味わいを感じ取り、音階によって曲想が生み出されていることを理解する。

### (11) 第4時の展開

時配	学習内容と活動	指導上の留意点・評価
導入 12分	1 3つの音階の特徴を確認し、楽曲を2曲ずつ聴き比べ、使われている音階を感じ取る。 ①琉球音階「ていんさぐぬ花」と陽音階「ソーラン節」、②琉球音階「ナークニー」と陰音階「島原の子守唄」、③陽音階「こきりこ節」と陰音階「春雨」を聴取する。 2 本時のめあてが『日本の音階を使った音楽を感じ取ろう』であることを知る。	○2曲ずつ比較聴取させる。 ・郷土の音楽を教材として取り上げ、自分たちの身近にも、日本の音階が使われている音楽があることを知らせる。 ☆日本の楽曲を聴いて音階を識別することができる。(挙手)  ○本時のめあてを伝える。
展開 30分	3 洋楽器による演奏の「春の海」を聴き、洋楽器であっても日本の音楽の感じがする理由を考える。 4 「春の海」を黒鍵で演奏する。 ・教師の範奏を聴いて、「春の海」の冒頭の部分の旋律を黒鍵で探り弾きする。 ・教師の伴奏で「春の海」を演奏する。 5 「春の海」を視聴し、日本の音階の味わいを感じ取る。 ・箏と尺八の演奏を視聴する。	○5年時の学習を想起させ、日本風に聴こえるのは、日本の音階（陽音階）が使われていることに気付かせる。 ○教師が鍵盤ハーモニカの黒鍵を使って「春の海」を演奏し、同様に音をみつけて演奏することを促す。 ☆旋律を演奏することができる。(演奏) ○「春の海」の原曲を視聴させる。 ☆日本の音階の味わいや特徴を感じ取ろうとしている。(観察)
まとめ 3分	6 本時学習のまとめをする。	○音階が要素の一つとして大切な働きをしていることを知らせる。

### (12) 第4時の分析

#### ① 音階の識別

音階の識別力が高まったにもかかわらず、両クラスとも「春の海」を陰音階と答えた。その理由は、楽曲冒頭の緩やかなテンポ、静かな雰囲気、陽音階の中でも民謡音階のため律音階より寂しげに聴こえたなどが、児童との話し合いから推測できる。

## ② 鍵盤楽器での探り弾き

鍵盤楽器の探り弾きを今回初めて取り入れた。やり方としては、弾かせる部分を十分に聴かせた後に歌わせた。その後、練習時間を取り、音が合っているか答え合わせしながら活動を進めた。最後には良い演奏ができるようになり、児童は旋律を見つけるのが速いようである。順次進行の旋律で、五音音階の日本の音楽は探り弾きに適していると考えられる。

## ③ 音階の理解

「春の海」の演奏後に、日本の音階の特徴、順次進行、それぞれの音階の雰囲気などについて再確認した。最後に確認することで、日本の音楽に聴こえる理由に、使われている音階があることの理解が深まったと感じる。

### (13) 児童の振り返り

#### ① わかったこと

「それぞれ違う特徴がある3つ音階。陽音階＝明るい感じ、陰音階＝暗い感じ、琉球音階＝沖縄のような感じの3つの音階がある」「音階が変わると曲の印象が変わる」「日本の音階は隣に動いていく順次進行でつくられている」「日本の曲、外国の曲か聴いてわかるのはなぜかと思っていたけど、日本の音階があるからだ」「音階の音で曲をつくっていたこと」「音楽の世界は広がった」

#### ② 音楽をつくってわかったこと 感じたこと

「音楽をつくるのは考えてつくらなくてはいけない。つくるのは難しかった。」「音階を使ってつくることによって日本らしく感じたり、印象が変わったりする」「反復を使ったり、音階の音でまとめてつくったりしたら曲らしくなる」「順次進行していけば音楽になり、おもしろいと思った」「音階によって終わるときに合う音がある」「同じ音階でも人によって曲の感じが違い、つくるとこんなに違いが出るとわかったのがおもしろかった」「つくると3つの音階でこんなに違いが出る」

#### ③ わからなかったこと もっと知りたいこと

「日本の音階は3つだけなのか3つの中にも種類があるのか、もっとくわしく知りたい」「日本の音階を使った音楽をもっと聴きたい」「外国の音階もあるのか、他の音階も聴いてみたい」「どうしていろいろな音階があるのかその理由」

### (14) 児童の振り返りの分析

3つの音階の音楽を聴き、その違いを感じ取り、音楽をつくるという活動の中で、聴くだけでなく旋律をつくってみて初めてわかったことがある児童が多く、音楽づくりを通して、それぞれの音階への理解が深まったと考えられる。

多くの児童がもっと知りたいことを書いていた。それらから日本の音階への興味、関心が高まったと感じられた。それだけでなく、音楽そのものへの興味、関心が高まったと感じた。

### (15) 実践を通して

児童にとって日本の音楽は遠い世界であり、関心が薄いと思っていたが、授業を通して、教師が思っていた以上に児童は柔軟であり、関心の高まりを感じた。



鑑賞では、聴き取らせたい曲想や要素を明確にし、聴取の視点を児童に示めせば、西洋音楽も日本の音楽も同じであった。

楽曲を聴き比べるだけでなく、自分で旋律をつくったり、友達のつくった旋律を聴取したりすることにより、音階への理解が深まったと感じた。また「春の海」を鍵盤ハーモニカで演奏したことも学習の深化につながった。表現と鑑賞を関連させ、学習を往還させる指導計画が、音階の理解と感受に有効であったと感じた。聴くことと表現することを繰り返すことで学力の定着が図られるといえる。

#### IV. 考察

綿密な計画により、各時間ともに子どもたちが何を学ぶかが明らかな授業であった。それによって、音楽的理解を得ている姿、得た知識を生かして作品をつくり上げる楽しさを実感している姿、また、作品をつくることで改めて既存の音楽の素晴らしさに気付く子どもの姿を観ることができた。ねらいが明確なことから、一つ一つの活動内容も明確となり、何ができるようになればよいのかが明確なことから子どもたち自身にも「わかった（3つの音階の識別ができるようになった）」「できた（音階を使って旋律をつくることができた）」という学習の成就感が生まれていた。ここから1時間ごとのねらいを明らかにすることの重要性と表現と鑑賞の関連を図った題材構成の重要性を本実践で改めて確認することができた。

また、ねらいを明確にするためのポイントとして以下の2点が見出された。

- ・評価できるねらいを設定することが重要であるということ。各時のねらいが「楽しもう」というあいまいなものでは評価が行えない＝指導ができていないという状況が起こりやすいため回避することが必要である。
- ・「できない→できるようになった」「わからない→わかるようになった」という実感を子どもたち自身が実感できるねらいを設定することが重要であり、それによって学習の成就感が得られ、次の学習への意欲を喚起することができる。

表現と鑑賞の関連を図る際のポイントとしては、以下のことが確認された。

- ・表現の活動の際に参考演奏を聴いただけでは、両者の関連を図った題材構成とは言えないため、音楽の要素や仕組みをポイントとして二者の活動に明確な関連を持たせることが重要である。今回は、音階をポイントとして二者の明確な関連を図った。
- ・表現と鑑賞を往還することが重要であるということ。鑑賞で得た知識をつかって音楽づくりをするという流れの先事例が多々見受けられたが、それでは鑑賞→表現への一方向である。鑑賞→表現→鑑賞…というように二者を往還するような題材構成が知識の定着という観点からも表現の深化という観点からも重要である。

## V. まとめ

本稿で示してきた、ねらいの重要性、表現と鑑賞の関連については、すでに研究者、実践者から繰り返し指摘されてきたことである。それでも、音楽科特有の課題なのか、「歌っていればよい」「楽しそうに活動していればよい」といった実践がいまだに多いのが現状である。ねらいの重要性、表現と鑑賞の関連といった一見当たり前と思われることも、それを実現するためには、教師自身の音楽への理解と綿密な計画が必要である。新しい教材、わかりやすい手立て、様々な学習形態の開発など、新しく何かを開発していくことの必要性ももちろん感じるが、一見当たり前と思われることに対し、丁寧に取り組み実践し、振り返りと考察を行うような地道な実践研究こそが必要であると強く感じる。

小学校段階の音楽科教育の質的向上を目指すには、ねらいの明確化、表現と鑑賞の関連といった基礎的な事項を十分に踏まえ、一時間ごとに「何を身に付けるのか」という学力を明確に目指し、把握していくことが重要だと本研究を通して再確認することができた。

「活動あって学びなし」という授業から、一時間ごとに学びと成就感のある授業展開は、子どもにとっても「今日はこれができるように（分かるように）なった」という安心感のある授業となる。何ができれば良いのかが不明確なまま得意な子どもだけが活躍する授業では、不得意な子どもはその克服の仕方さえ分からず苦手なままである。スモールステップで何ができるように（分かるように）なればよいかを示し、手立てを用意し丁寧に関わることで「今日はこれができるように（わかるように）なった」と子どもたちが実感していける授業であれば、音楽科における学力を育むだけではなく、子どもたちの苦手意識も取り除くことができるだろう。理解することと表現することが豊かに関連しあい、ねらいを明らかにした成就感のある授業によって「音楽の授業が楽しい」「音楽が好き」という子どもたちが増えることを切に願って本稿をとじたい。

## 参考文献一覧

- 国立教育政策研究所教育課程研究センター（2011）『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（小学校 音楽）』平成23年11月
- 津田正行ら（2012）「特集2 音楽 学習指導要領における指導のポイント「表現と鑑賞の関連を図った題材構成の改善・充実」 『初等教育資料 2012年9月号』 pp.60-77
- 福井昭史（2004）『音楽指導ハンドブック(25) 音楽科授業の指導と評価』音楽之友社
- 福井昭史（2006）『よくわかる日本音楽基礎講座—雅楽から民謡まで わたしたちの文化を知ろう、伝えよう』音楽之友社